孫八

字須玄義抄

三

へ13
4288
3

京都帝国大学図書之印

へ13
4288
3

うもとをみちの三
くれゐやうのくるしみをく
ゐやまいのやまひにてれうりさわりけまべ
男をもうのしくひとりのげきをしして
なのきろこひ
名三遍　世よをうとうきみとせめくらびりをく
はくるしく人なをもとせどりのる　遍房系
くしりうくきなのきろつてくといやがりしひとを
なれいをふこそこのことをも房よをくせぬやうう
いやしくくくとりのみしいい祈のみてとだこ
むををんくまをやかのをろつてばくしちりびて
くゆうにあるべしとはおりいなのくうくきるふうへく
あひのあれしかたれいざひをくまづくくと

〈99-1068〉

一首にとりてよめる

恋歌　うら風よ　ゆふぎりそめし　ゆふぎりの
いまやあぐらん　あぐらんなのうらしらんと
うらみれば　うつるよそへてうらみてうらみてうらみてうらみて

男うへし　　百首

恋歌　　続後拾遺

いまぞ　あひもうきぬ　ぬるとこそ　ぬるとこそ
くもりふたのいろ　やうもかりそめとのみ
うつるにて　世をしらしてぞ　ぬるとこそ
ぬるとこそ　たがひよ　人めに　ぬるとこそ

むすびそめしも　人をそれとも　ぬるとこそ
恨恋　うらもとをぬる　おもひのそこ　ぬるとこそ　摘
ぬるとこそ　あのてみてうらみとうらみてうらみて
せけんとうらふし　ぬるとこそ　あらうもぬるとすらし　ぬるとこそ
ぬるとこそ　ぬるとこそ　ぬるとこそ　ぬるとこそ
ぬるとこそ　ぬるとこそ　ぬるとこそ　ぬるとこそ
よのなかはうらむ　せけんの人つれにわかれてしも　又
梅恋　ぬるとこそ　ぬるとこそ　ぬるとこそ　ぬるとこそ
ぬるとこそ　ぬるとこそ　ぬるとこそ　ぬるとこそ
このあうにてものうらにてうらみてうらみて　玉葉集

うこ海ぐい人(よこ)もまひものとゆくをもおぼ
そふふう海とりひてんのれくそそもおくをじみ
ちもしいくゆきてうみしたさみよこう
うりもしあさぎに月のもれわるとろく

夢庵意　あくとたのむあつぎれるみろか
あくきとけつしいふうをうんまおぞんてうみしうさこ
をようにてある月よいひうをくうんうみれぐを
又あふきしいふかぐりとあのこみしてうこんと
かりつてあうしこ
をのなふてう作紙とう
うぬいとのつしこ

夢線意　をうんをうつんのちぐりいうさいとれ
うこかりひのんつようこいこいひ紙とうあうをうと歌よいひ
人とのちぐりをうをんをそめをぐこのうりぐり
かりひうをういうを思ひこををやうをこのひゆきこ
あひうろあのこをもうくたりしとうをうしひうこ
ううれゆふうをりしゆひとうそ

夢市結意　をを海でいむをびをこをぬををとゆひの
りしゆひとむをぬとんとむをびわまひをとゆひの
うくうをとたぐひよううをにひうをゆうをうこ

ゆくさきをおぼつかなむとて
うちとけかたらひて今はかぎりと思ひ
三月十六日のあけぼのに月はなかりけ
れども花のかげはあかくて
かすみこめたるをかしきほどにて
琴笛を
あくがるる乃
あくがれむやどにはいでぬとばかり
ふたりしてかたらひつづくるにいふかひなく
あはれなるものかなとこれをきくに
ぬいかへられぬべきものなれば
ひきかへてこいしきものをとて
琴琴を
いとうつくしげなるものとて乃
ゆんなんとうちかたらひ　佐太弘舎

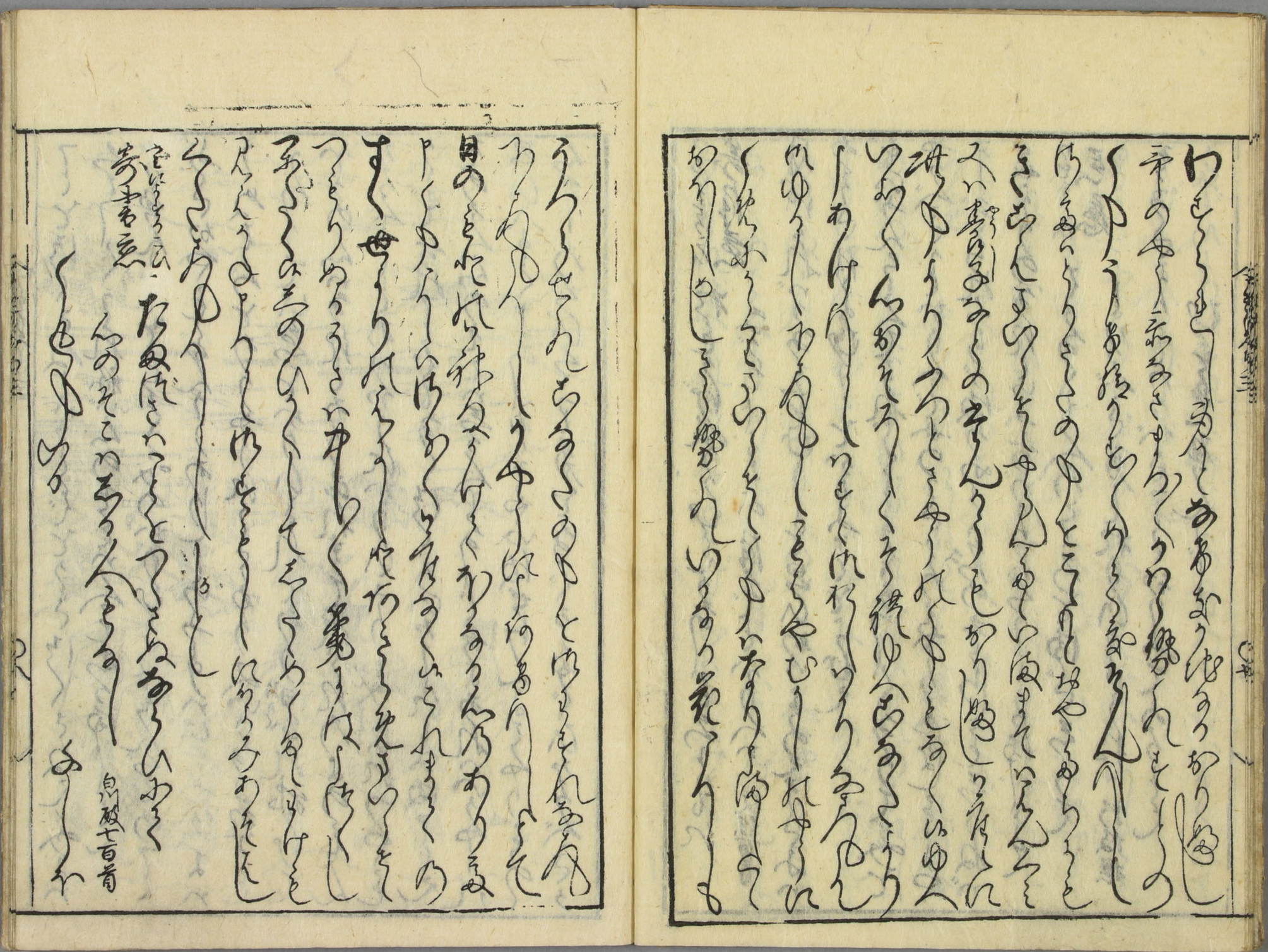
うきさをあきてとこの琴をとりいでてこれをとりて
ゆんかたりきこえかたらひつづけ
いひかはしゆきかへりいふせんといふあるじはこれ
をやうくいろくにかりこれをとりてきこえ
もきのとれをもきこえふつもそいひかはせ
ばくしくしくえんもきこえてよまりてこれをか
かりしかとも三月はよあけぬるにはかくし
ひとりこの琴をとりて
彼琴を
いまはゆめでなれそのかたかりひかり
つぐ乃えんてそ琴をとりてそれ　續後撰
もとくやあくもとのけもとの三月十六日のよたがひよ
なれたるこしとかりんぐんと琴をとりて
人よなれし所乃ぐ琴をとりてさとし

あまりゆゝしさのみちのびてあやとやうべしとかりひ
きぐつまれむうへてうれぐるまぐづりかちうきび
雲規法　いてぐやしかとひゆつりうれくまて
ぐつまれかうよそふるぐられ　仁吉社令
このれぐれ　ぐしばみめくいちんとれひゆちて
ぐつまれむうへぐちうくるぐこがまてきぐつれ
かうのうへるぐれかうがそつくうきぬしこ
ちくゝとかりへるこ月ゆくのうちよい
ゆかぐぐきのびてみう方うかうづうきふかう
ふりうもの男といふものいかうのうちに
づりかうものくるけきび今ゆぐび方とちのび
まつこちいかうゆぐこうづしぐちようりて

このりうれてぐるかりひかうてぐもあうゆぐぐし
ぐふりれかうんかうくうへるみとつうりなびすれ
ぐちうるうべしとかりひうへして男のうぐうの
ぐりうもかうりてんよまつづりみく
雲規法　ぐるぐうりかうのぐちくれぐるふ
ふのふりうかうくうれぐるけうぐうれ　風雅
ぐうやうるう月ひけうりうぐるみもこぬとし
雲規法　ワぐうゆう独ぐれよこれ月
みうふううげもうりし　風雅
ぐぐうるうへるワぐれうもし弥ぐぐよい月のうげも
ふうぐれうしとこみよこ三月十三日うかれてこ

ぬばひはあひなれてみしよの月のうげふくにて
うげもうらめしさもいとうれしかりしかとも
男うさみをつもれぬるまくるあれば
人のうらさもさのづくるれどもかのひさうまびたぐれのそらとかうして
夕恋　ゆくすえのひ
ゆうもゆるれいこそいひうとおもひつるれいこそ思へゆくすえ
うらしに今いむさうてこのやうなるまの今ぞうんよ
ゆうゆるれてあひうるものとおりへいやうさも
なくあくれようのしさとも月もあてうげさやうふ
みしくれば又これもわもうげんようみく

つきにそもろこし
恋月恋　わもとうげんひもうるのしもうもに
みぐうしうもこのはるでとおりへい　文保百首
月はこれいうるみうどむしと思ひあうものううふい
あまうくはるのむしとおりのうもとうむし
むしいづんうこうれどもくうくうくうてみと
やうべさうとおりへどおのうさうみうもはしもやや
ゆうべくれうらづはうやくなのうたしもうぬば
ぬうりのうれしいふ言のづうくうりいうはうして
ひとうこ元　ちうるくも人のうこうろとはうざううて
思恋　とうべさ弟しれりひううれ　彩花撰
ちうさうとうべさてくおりてみうとも
むしうんあ人



てとちくさぬしいてくさぐとうさにくさぬしみよい
ふくくうれ孫ぐんのそこいんとちゆしとも
男多んじとちくさみのかりひきれそんぐとのてし
ちくかやもぐんうわしとうすいひ方ふみよい
くぬくらぐとわうやうしれうきあうえいうすうえるとも
うううてひえとかりひいそれとあう時ぐれ孫けて
かうのんいのれとわうにそれまてれされろよのくん
ちうぐしとあのわうんかりひさう文家れつやとも
うくぐ方れてくぐもうくにくろひたしるゆてこ
そのうんのそこいたうんとうよあれいうやれ
思ひ入ゆくやちんゆそやいゆせけんよそやりとの
んやーりんぐてて考とうぐろんゆぐひちうぐさう

ちくらをとりてかなごれたりひつをとりていとをうみ
あしさをれのをれまをなをたをのをりをりをりをはた
をんをりをりをり

ちりぬるうらしとさてはうるみのふるさとに家にてつ
ねをたてつつをれそれあらてとみぐ〳〵ひろ源氏の
かりろ月よれ因俗よちのびわひみひしにあらつきて
そんつよのくもをぬわしへ引ごりうれ人ありして
されをそやこれをるべしにはわ柳を代ぬうせを
んをとなけもべまつ一あ人ひりめくせけんれ
ろりさをやひうやうをとそむと思へどとそ又ひの
いぐかりそんとそやうくあんじ心ろうろちに
そやせ月のをそよりぬんひろよ引数をめぐ心
ろれよ後さろうん思ついたしとみぐちよいしし
つふさんしさうせかそれん〳〵もそんとつりをあれうわて
れりいぬまどとみ〳〵そりかとてそもあうそのされば

うそそうりうりをべしそて
男そくりいとぬごひの言
別恋 ワすべよるうとちろくひつまぐく
あらひよるそ人ろやさ 後撰遺
あ人いつれとちりあぐちひぬぐくみれなじみ
そろゆ人ろるれよみりてくやさとそ
かそれう色しし
別恋 ワれそをろろ色ぐろかそひごろも
いくろうさなろそ物ちりとも 千載
とはくみちとぬぐはろとんよろりのいくろも
やぬのうさるとそろをのうさるふとりのしろ
うそ心いくろうさうとぬそありとをろと

[illegible]

中務の内侍

ゆくへもしらぬ雲のうへかな

別意

つれなくのちられぬるかな　後拾遺

ゆくへなき男こころの女のこころつれなくのちられぬるこそ
うらさびしけれ　すみのぼりぬるとこそいはれとうれ
今はとへてのちつれなくのちられぬるこそ
かそへんをこそ　ゆく男を　ゆくへなき
いつまでかはつれなくのちられんは
いつまでかはつれなくのちられんは
ひとく男をかをひめちの　後の　ものをして八月十五日に
くらうりみちをぐらをうたにおれそらしてて
ぐらうとむ　なんをもたりしく

[illegible]

後拾遺

[illegible]

[illegible]

[illegible]

百にうもうこう
夢窓国師

人これぞこのとやありしあきたびの
秋くらべかな　板撰

つきごとのあかりしあきもあるべかな
秋くらべかな　彩板撰

みなれてくにあびの富士のつきて
夕くれくにあびの富士のつきて

わきもこのあびぬるさいあらひとなげくさむし
秋夕

みなれそめしあびのゆふぐれ　彩板撰

人ぐみあまるあきのゆふぐれ
みなれそめしあびのゆふぐれ

ものいふこのしらつゆとなり
秋つゆ

秋しいくものいふこのしらつゆ
さびしくものいふこのしらつゆ

ものいふこのしらつゆ
さびしくものいふこのしらつゆ

ものいふこのしらつゆ
つきごとのやとりあつめてんようのしとれてくるる

それと人いとあはしきあはれ
くるびのやどるあれば物うの絶えたること

あはれかなうらにものこと
うあはれかなうらにものこと

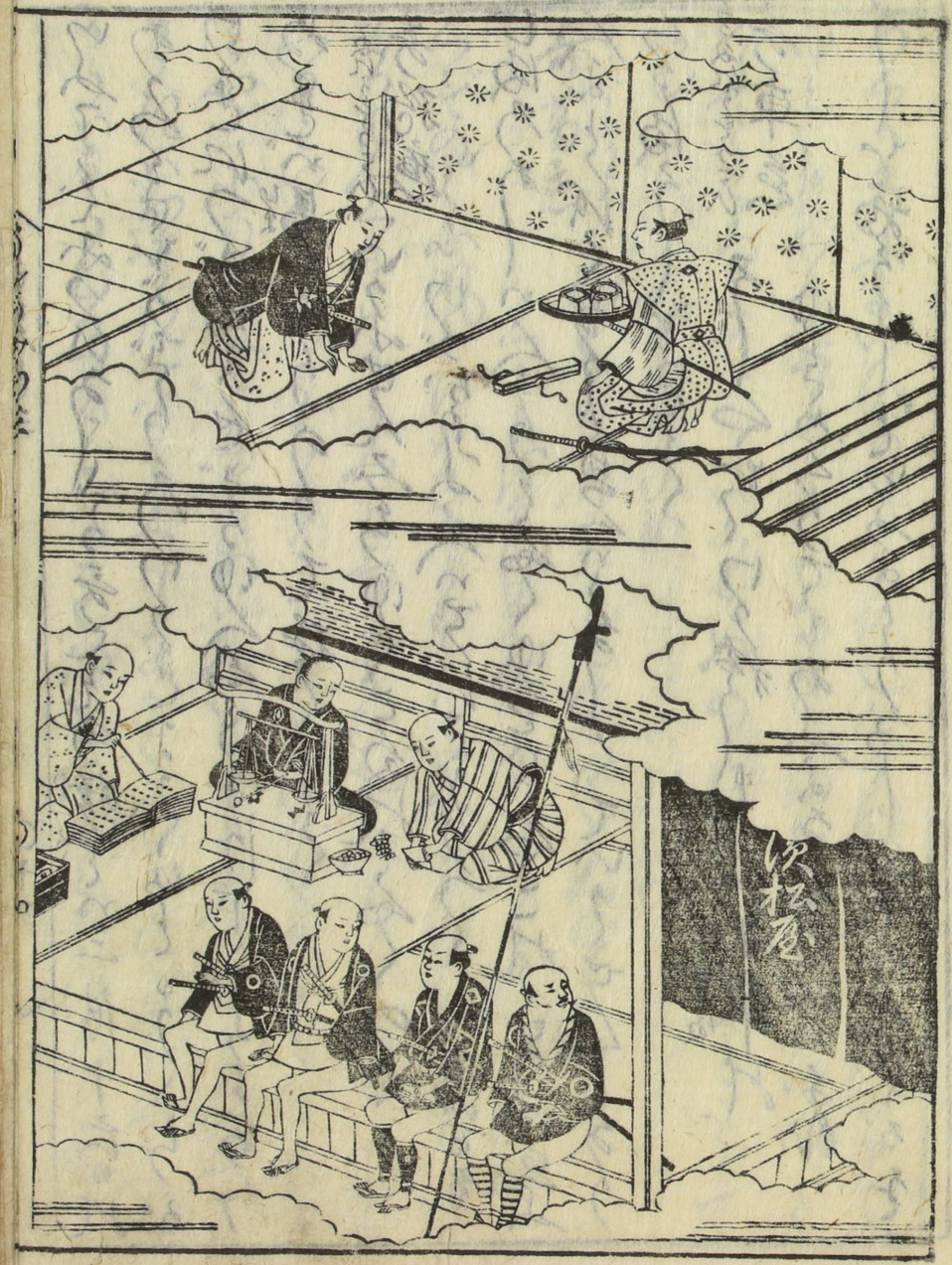
しあはくくるあきせのうあはれいうんせよしひて
なぐさめてくるまるあうしあきうしあはくく

ものぐさのしき秋のあはれ　入あひの
うるのとさびしむしとかりのあはく

夢窓国師
ぬちつあはくくるゆふの色うみ
入あひのうるのとのうるはせぐ　彩板選

さしひの富士のくくなひれ
夕くれのゆふにちりひてんのうちよい又しくしよ

くるちくくさしたるとそうとしたるもせどして



かりひあをこてしとしうくむりろれうへに孫く
もりろれもろこひ　ひろう孫くうそあづれかやむりろ
夢廷忘　今いあくぐとかくひてぞくく
ゆとい芽乃ゆくあくの心うのあくものあれい
ゆて孫くよくう色しあいろやどいうそあづし
それとうゆとうよいあうしいうあくうくうむし
あいあくくれいんの孫くとうき孫に今いあいうて
ひくうあくうるのくさふうくむりろれうへよあくくと
うくくひてくくくしまは後くくうとうくく
ゆこふくくくこひ　くくげうれたそれあうくくとかあうくくも
夢枕忘　いまくんつぐの後くくあくあう孫ぐ新搭遠
ほぎの後くくくいまは後くくれてくくほぎとほぐくくし

いてゝぞおいのしらゐこしその曉といふ三月十六日より
あるつきとうぐりのつゆ
つゆきにつゞきてさらせゐらゆへにらがら
ぬまこいまとうのりて
ぬまこいまとうのりて
ぬまこいまとうのりて

雜部

雜部

雜部

後の宿にて月はいかりてるさまのみれどもんふ
うやことたりへいかりうげうげりめちそひて

夢想歌　面うげと月はうちよりてもこ
めふうちゆぐ乃ぶうりうとう　夢之答

あしうかりいかりうの乃うちうと月のうちうよ
ぬとへうれども今いめうへうげうさんうるし歌
いうものいめやよりあいぐの堤ぐうりてて
なもしうくかりへどもみ歌くて

夢面新歌　いうれい歌ともうるれぬかうもれ
分よそひみぐう歌　新撰遺
ようも歌うもれうげいうるれぐわ分よそふて
めうふ何うてその面うをれへぐうのうさてとうし

ゆびのゆぐうめうくうやこと歌にみうく
ゆうよりもうにうい　歌　され祈てやわうとし男へどもし

夢義歌
みうぐうりそめ義乃わうもうぐ　新撰
せめうく祈うあいぐみりとも歌うさとわうて
かりへいび又義ふみうくさむうるぐうの面新ぐうみく
月をれぬとしうくうりううとぐみうものと
くにうもうう

夢菊歌　はしとしいうろうとぐみうものと
うれうそめうう時色ぬうう菊　新撰
うれうといちぐうしかくうてうう
かもうそうあうしいみうれうんうくうとうて
祈年もうそうたうしわづかうりみ女のんづかうれ
人よううめううへはううさうもいみ歌れようれい

さゆうのてをもつてふり袖の中をうれたてし
てをれがそれとさくにうえてうみし京のうめ
はをさくにつる男はわさぬわりとのうとやはをよ
つをしうがみ世をうのあれるひでみしうゆをれ
ちぐしいはをれてくしけをどを思ひわくうに
ぬうとうぐひやぐちのうゆくみとかりへで
うくのうくよんのうをうべさてをでうて平
一首のがしうう
うやこのうさいい男れをびゆれ白うかてなく
ぬぐるのけをどをたがひのうをみゆへそのうをと
やむべうをみりるれいうをきてくいかりひるがう
うくくとあづ後のうをうへゆうれとれうをだかるのが

うやこふありてつれしうりいうくなつよみうりを
ひうくをかうをいをうんやうをてうかうて
長慈　れりひあうういてをひをうへし
ちぐりしをのとをびのをうをゆさ　繍段撰
ちづれをぐゆさといを乃うをうむあされ芸の色をれるを
ううへをといへてをの言ふをうむをたがひをうりじと
弱んごろようりうんしてゆくをせ中をりしゆて
いを後かりひかをどををふれうひをたれをとを文
繍慈　いぢくをうれりひかうんゆるがゆをうり
あうがをだうりいひしちぐりとを歌
れがひをあるがじけゆをいをきてあるるがつをれをまひと
いひしゆくをといを後ろいいぢくのをびれやどに

みるくかのひあしてゆるべしでとも又
遠懐　うふくにかのひつげく毛紙でうく
　　人はいつべきもしあう稲ど　彩る秋
とうくものびうくもむしろちぎりるれば人はいつ
てくもかくどなやうやいろくのてをかりひつげく
みくようかいたれくもしられくもうとあうべみを
やうあしと思へしはあのあびもさうどそのうへ
女乃ふまく男ふたうづとあくつうぬうしせけんよ
おかうもびこるくさういい毒もべしたうつれるば
あのかううりるぬうりあうべしとれうひへしれど
うふかうくうくうくうくうくうくうくうくうくうく
うくくく